

# 宝珠岳城周辺遺跡

福岡県糸島郡二丈町大字長石所在遺跡の調査報告

二丈町文化財調査報告書

第45集



2009

二丈町教育委員会



# 序

本書は二丈町大字長石に所在する中世遺跡の調査記録であります。

遺跡は戦国期の山城が築かれた宝珠岳の北側裾部にあたり、柱穴の検出とともに、輸入陶磁器などが出土しました。

今後、本遺跡の調査成果が糸島地区の中世史研究の一助となれば幸甚であります。

平成21年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 藤田孝治

## 例　　言

1. 本書は、自動車修理工場建設に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は、申請者からの受託を受けて二丈町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の期間は、平成20年1月10日から平成20年3月7日までである。
4. 本書に掲載した遺構図の実測は、菅、古川が行った。
5. 遺構の写真撮影は古川が行い、空中写真撮影については(有)空中写真企画に委託した。
6. 本書に掲載した遺物の実測ならびにトレースは古川、諏訪（福岡大学2回生）が行った。
7. 本書の執筆ならびに編集は古川の協力を得て菅が行った。

## 本　文　目　次

	頁
I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の環境	
1. 位置と環境	3
2. 二丈町の中世山城	4
III. 調査の記録	
1. 調査の概要	9
2. 遺構と遺物	9
IV. 調査のまとめ	
1. 遺構について	16
2. 遺物について	16
3. まとめ	16

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成19年10月、二丈町大字長石において自動車修理工場の建築が計画され、町都市整備課に開発届が提出された。これを受け、町教育委員会としては周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの、戦国時代の山城である宝珠岳城の裾野に当たることを考慮して試掘調査の必要性を打診、11月に原因者からの埋蔵文化財試掘確認調査の依頼の提出を受けて、試掘調査を実施する運びとなった。

試掘では建設予定地である丘陵（宝珠岳城）裾野において表土以下、直ぐに遺構が検出され、北側に向かって遺構面が深くなるものの、ほぼ全域で遺物包含層が確認された。この結果を受け、申請者（原因者）との協議を行ったが、結果的には遺構面に到達する鉄骨基礎部分のみを記録保存として発掘調査を行い、建物床面は掘削を伴わない基礎に計画変更をして頂く事で協議が整い、平成20年1月10日より受託事業として発掘調査を行う運びとなった。

## 2. 調査の組織

発掘調査ならびに報告書作成に従事した組織は、以下に記すとおりである。

発掘調査 (平成19年度)

報告書作成 (平成20年度)

調査主体 二丈町教育委員会

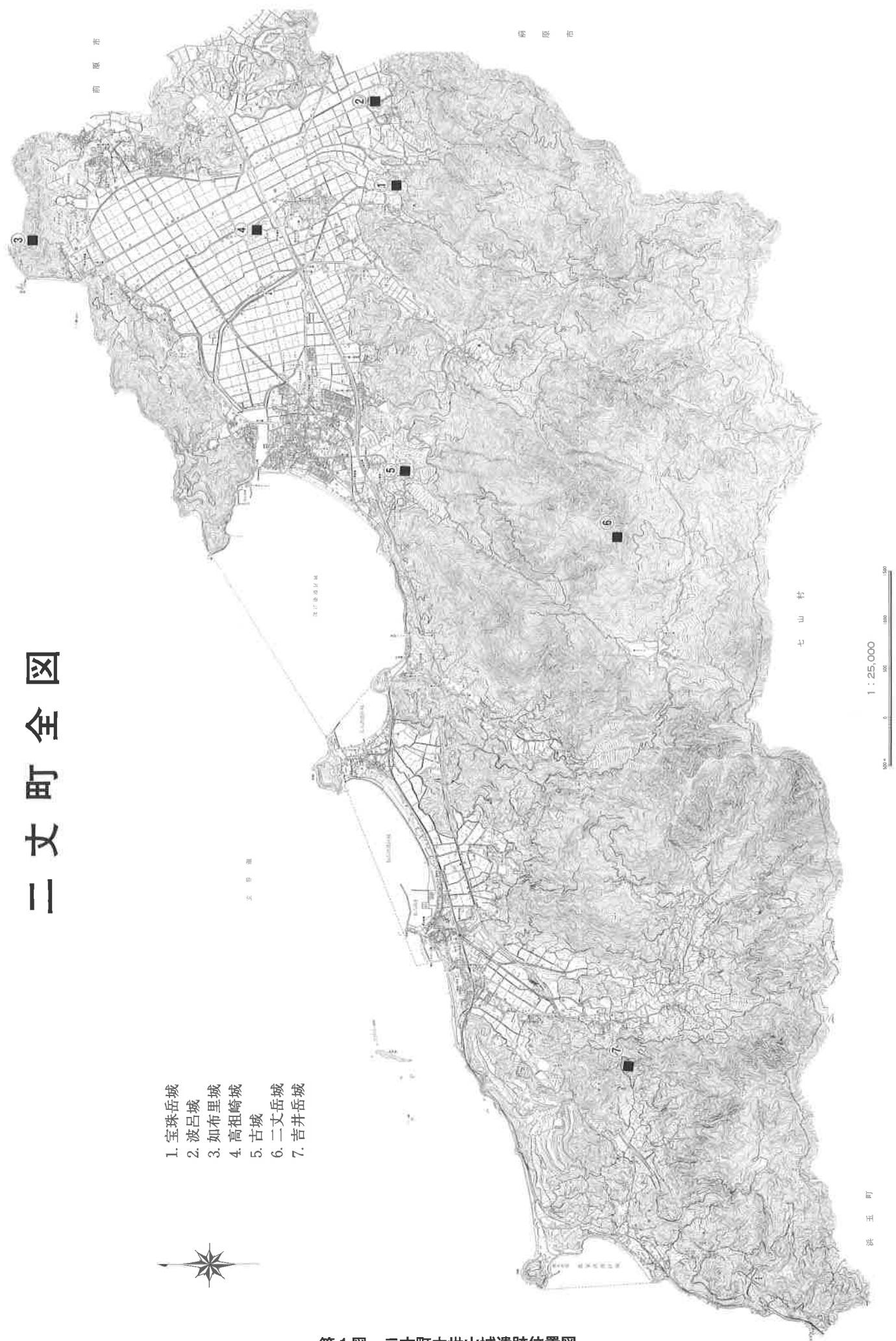
総括	教育長	藤田 孝治
	教育課長	松崎 治幸
庶務	教育課課長補佐	松藤 公元
文化係長		古川 秀幸 (兼:調査担当)

調査 文化振興専門員 菅 さとみ

調査作業員 庄島 年美、坂本 乃婦子、黒柳 政信、深沢 規矩夫

整理作業員 木下 文子、吉賀 葉子、諏訪 広太

四全町丈二



第1図 二丈町中世山城遺跡位置図

## II. 遺跡の環境

### 1. 位置と環境

二丈町大字長石地区は、町の南部を東西に走る脊振山系の山々を背後に、そこから北に向かって伸びる舌状丘陵に挟まれた中山間地域であり、前原市との境界をなす地蔵から派生する羅漢川と、二丈岳からの一貴山川によって形成された沖積地の一貴山平地を見渡す高台に集落が営まれている。

この長石地区の中央部西よりにある標高62m、長さ約130m、幅約100mの丘陵上には、大内方の家臣西鎮兼が城主であったという宝珠岳城が築城されており、今回発掘調査した遺跡は、丘陵の北側裾部にあたるため、同城との関連性が注目される。

戦国動乱期の糸島地域は、鎌倉幕府から筑前・肥前の守護、また太宰少弐に任じられた少弐氏（武藤氏）と元寇の功績により志摩郡東部の総地頭職となった大友氏（豊後の地頭職）、そして足利義満より筑前の守護を任命されていた大内氏（周防・長門・筑前・豊前の守護職）との三者による筑前進出抗争の場と言える。こうした時代背景の下、二丈町内には宝珠岳城の他に、13世紀後半頃に松浦中村孫次郎源続によって築城されたと伝えられる波呂城（城主・西豊国）や一貴山平地中央部の独立低丘陵上に築かれた高祖崎城、玄界灘を北に望む高嶺上に築かれた加布里城といった小規模な山城が点在している。また、町名の由来ともなった二丈岳山頂には、深江氏が城主を努め、原田氏の出城とも言われる二丈岳城があり、町西部域にある吉井地区には、吉井氏の居城であったとされる吉井岳城が存在しており、当時の二丈町が激しい争いの場であったことが窺える。

特に、この時代糸島地域一円で大きな勢力を振るったのは大内方の原田氏であり、今回の調査地、宝珠岳城との関係においては、原田隆種（了栄）の時代となる。永禄10年（1567）、宝珠岳城主西鎮兼、波呂城主西豊国兄弟の縁故あたり、原田氏の家臣でもあった西重国が、肥前の竜造寺氏と内通したとの理由で重国の大筒城は原田氏によって攻撃を受けている。この時期すでに大内氏は滅んでいたが、原田氏にとって大友方の家臣でもあった西氏は仇敵であり、重国の縁故であった西兄弟の城も原田了栄の攻撃に合い、豊国の波呂城が陥落、次いで鎮兼の宝珠岳城も落城した。その後、西兄弟は部下と共に一貴山の山中に避難し、現在の前原市雷山の旗振嶺まで逃れて、そこで原田氏と激しく交戦したが軍は壊滅し、自害したと伝えられる。この事件により、現二丈町に居を構えていた吉井氏・深江氏は原田氏に服従したとされる。

しかし、その頃の九州は大友氏、島津氏、竜造寺氏の勢力が鼎立状態であり、豊臣秀吉の天下統一が進んでいた時期もある。その後、豊臣秀吉の九州討伐の折に大友氏が豊臣秀吉の配下となっていたため、一度は島津に味方し秀吉に対抗した原田氏は、秀吉に降伏、居城であった高祖城も壊されたと伝えられ、糸島地方が完全に秀吉側の配下に入る事となる。

## 2. 二丈町の中世山城

### ①宝珠岳城（長石）

『筑前國統風土記』（元禄元年（1688）編纂開始）には、「長石村にあり。大友家臣西左近鎮兼是に在城す。」と記されている。永禄10年（1567）、筒城城主西重国が肥前竜造寺氏に内通したため、波呂城とともに原田隆種に攻められ、落城したとされる。

城跡は中央部を東西方向に走る幅6m～7m、深さ2mの堀切によって大きく2区画に分かれている。北側には斜面に向



宝珠岳城

### ②波呂城（波呂）

地元で「城山（じょうやま）」と呼称される標高48m、長さ200m、幅100mの舌状丘陵であり、『福岡懸地理全誌』には「西長門守豊國カ居城ナリ」と記されている。前掲の『筑前國統風土記』には同城に関する記載は見られないが、西左近が宝珠岳城の戦いの折に、「兵を波呂邊に出して防ぎ」と記述されており、同城のことと指している可能性が高い。

城跡は頂部を中心として丘陵全面に曲輪と思われる平坦面が広がっている。頂上中央



波呂城

には幅7m～8m、深さ約2m程の堀切があり、南北2ヶ所の曲輪群に分かれている。堀切北側には細長い曲輪が延びており、その北側には比較的狭い曲輪群が壇上に延びる。堀切南側では比較的狭い曲輪群が南側尾根状に階段状になっており、両側に腰曲輪状の平坦面が確認でき、その斜面は切岸状になっている。西豊國は、宝珠岳城の西鎮兼の弟とされ、永禄10年（1567）、筒城の西重国が原田氏に攻められた折に攻撃を受け、宝珠岳城と共に落城したとされる。

### ③高祖崎城（石崎）

国道202号線（今宿バイパス）沿いにある糸島斎場の北側、石崎地区の北に細く延びる低丘陵の先端部（標高25m）に位置し、地域の人からは「城山」（しろやま）と呼ばれている。

頂部に広い曲輪の平坦面があり、曲輪の東側縁に沿って高さ約0.6~0.7mの土塁がめぐる。また、その下には幅の狭い腰曲輪が東側から北側にかけて付けられている。

原田氏が勢力をふるった、戦国期末には高祖城の出城とされ、江戸期に入ってからも唐津藩の寺沢志摩守より代官所が置かれるなど当地の中心城と言える立地条件である。



高祖崎城

### ④加布里城（浜窪）

二丈町北東部にあたる浜窪地区と前原市加布里の境界、標高123mの山頂部周辺が城域である。原田氏の出城であったともいわれ、起源は少なくとも南北朝にまでさかのぼる。また、高嶽とも呼ばれ、二丈町側の山麓には「南城」「荒城」といった字名が残っている。山頂部は東西に細長く、10m×20m程の主郭と思われる曲輪と、西側に5m×20m程の曲輪があり、曲輪の外周には切岸がほどこされ、急傾斜となっている。また、西側には櫓台と考えられる小規模な高まりがあり、山頂部東側と南側にも、200~300m<sup>2</sup>の曲輪が少なくとも三面以上あり、長さ17mの土塁も確認できる。江戸時代初期頃には、唐津津藩より遠見番所が設けられ、「魚見城」とも呼ばれていた。



加布里城

## ⑤吉井岳城（吉井上）

蒙古合戦の折、九州に下り、土着したとされる地元の豪族吉井氏の居城である。二丈町西部の福吉川西岸、吉井地区中村集落西側にあたる、標高167mに位置し、地元の人からは「城山」（しろやま）と呼ばれている。また、麓には「館」・「御屋敷」という小字名があり、城山一帯と「館」の丘陵尾根2ヶ所で城跡が確認できる。山頂部には主郭と思われる南北20m、東西4mほどの平坦面があり、北側の尾根筋に2重の堀切が確認される。また、南側の尾根筋には曲輪群も続いている。城山地区から直線距離で200m以上離れた場所にある「館」地区では、尾根上に細長い曲輪が三段続いており、一番高い所の曲輪の北側に斜めの堅堀が二条、東側曲輪の先端に六条の畝状堅堀が見られる。吉井氏最後の城主は吉井左京亮隆光であったと伝えられ、『筑前國続風土記』では元亀2年（1571）肥前の草野氏との争いで城下を焼き払われ、その後は原田氏の支配下に入ったとされる。廢城時期は不明である。



吉井岳城



吉井岳城頂上主郭

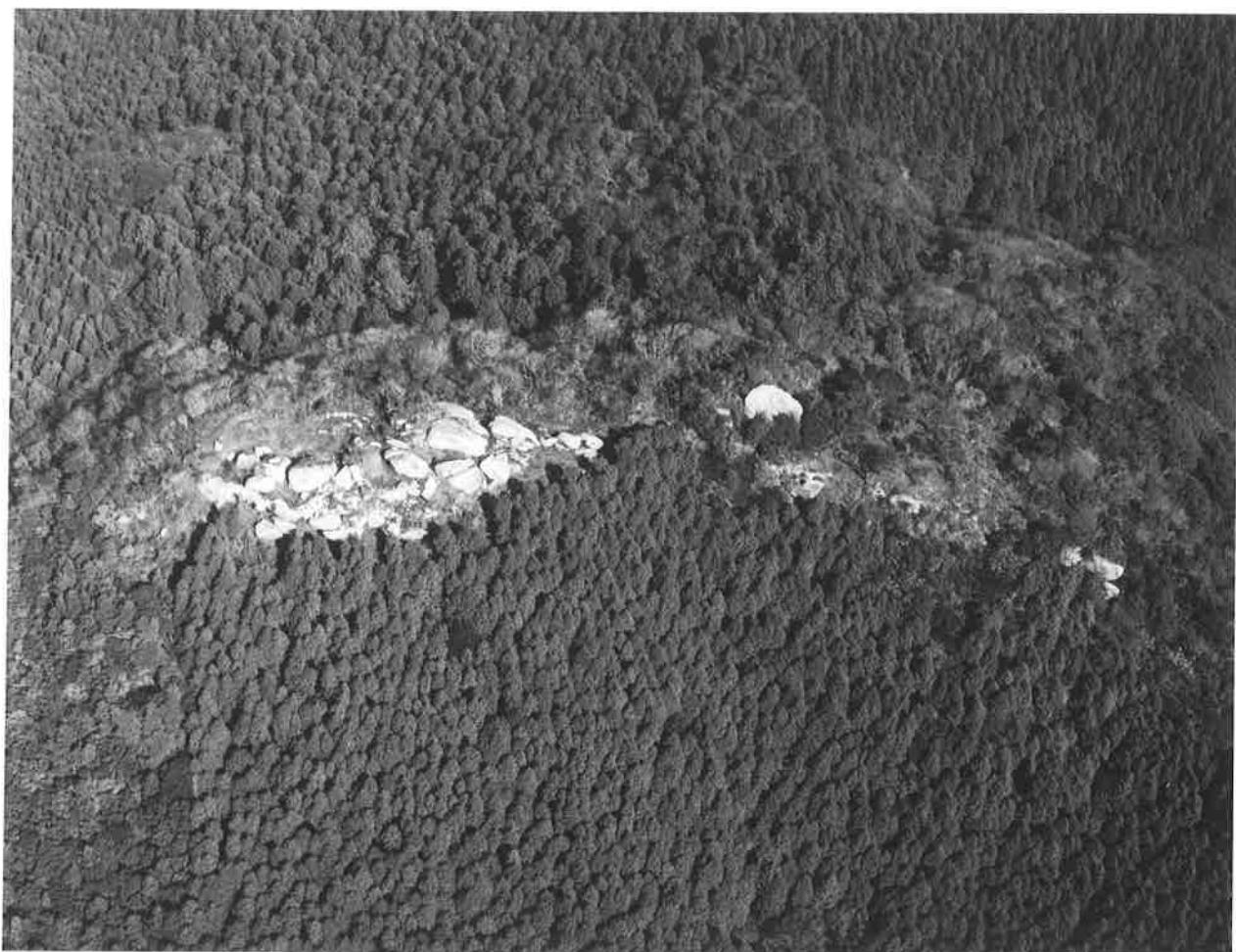


吉井岳城堀切

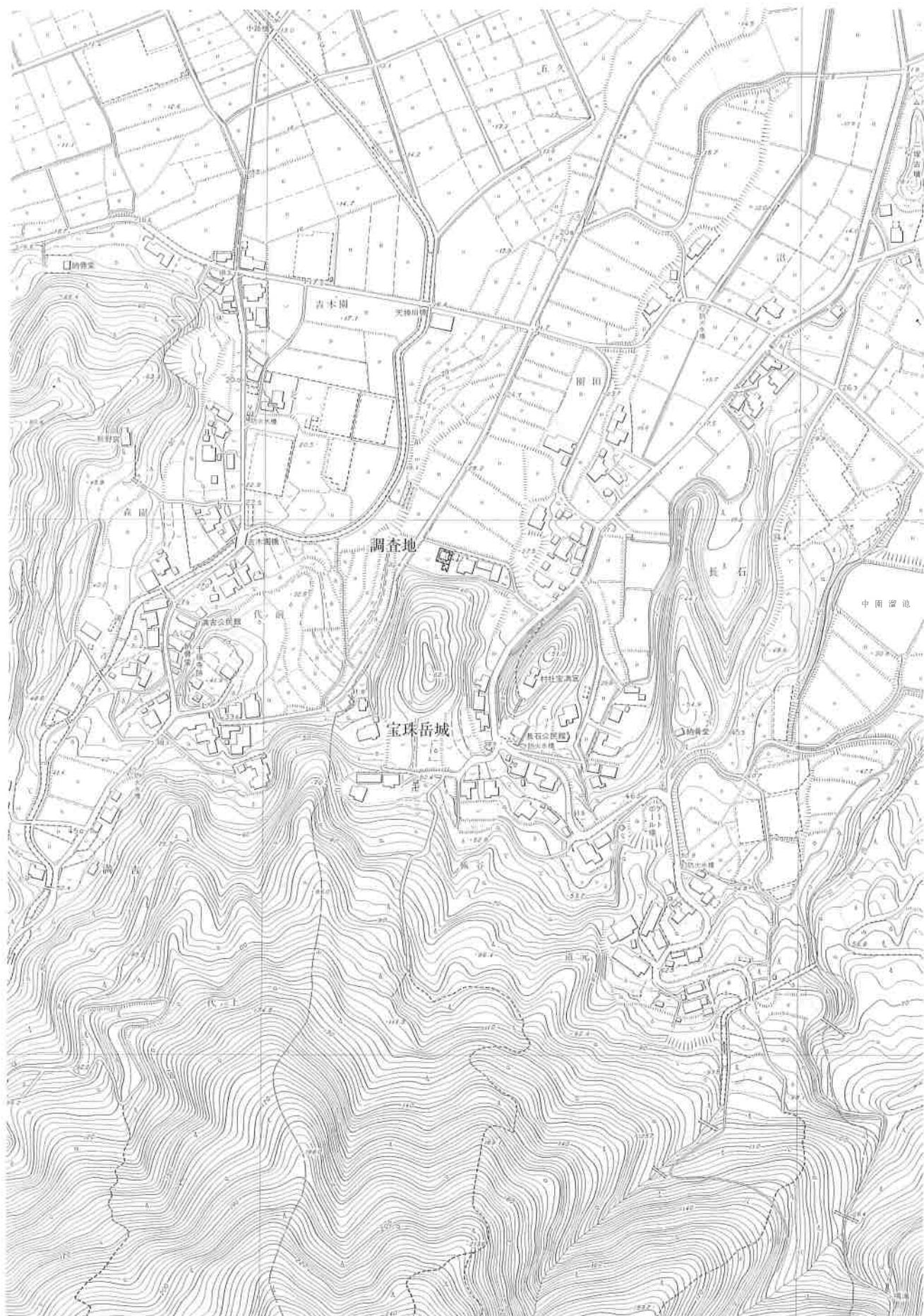
## ⑥二丈岳城（深江）

町名の由来となった二丈町の西南部、最大標高721.6m（三角点711.4m）の山頂尾根筋に位置する山城であり、山頂は「二重嶺」・「二丈岳」・「二城岳」・「人壽岳」・「深江岳」等、様々な名称でも呼ばれる。怡土郡西部の有力郷士であった深江氏の居城で、秀吉九州征伐時に落城したと伝えられている。山頂部は東西に細長く、西端の一部分を除いて切り立った崖となる。長さ約140m、幅約10~25mにわたって、山上尾根筋を平坦に削平した主郭を中心として、いくつかの小規模な平坦面が形成され、露出した花崗岩の巨石により平坦面がさらに分断されている。南側外周部に石塁が長さ10mにわたって確認でき、扁平な割り石を俵積み状に重ね、最も高い場所で基礎から2mの高さがある。石垣は巨石の間を埋めるように重ねられ、用材・積み方は石塁と同様である。また二条の堀切りが尾根筋西端部にあり、尾根筋反対側には、東側斜面からの侵入を防ぐ為の石塁が築かれている。遺物としては、瓦の散布が「国見岩」と呼ばれる巨石周辺にみられるが、散布地点が狭く建物の配置の想定は難しい。なお、山頂部から斜面を北側に下った、尾根筋の西側斜面付近にも瓦片や土師器などの散布が確認されている。

天正15年（1587）豊臣秀吉の九州征伐の際は、原田了栄の次男で肥前草野家の養子となっていた草野鎮永が二丈岳城に入っていたとされ、原田氏の拠点である現前原市東部、福岡市境の高祖山（標高416m）にあったとされる高祖城が秀吉に降伏した事により、草野氏が去り、二丈岳城も落城したと伝えられる。



二丈岳城



第2図 周辺地形図

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

調査地は宝珠岳城が築かれている丘陵の北側裾部にあたり、標高では30m程の微高地となる。事前協議において基礎に入る部分にのみ発掘を行うとしていたため、調査区は1m幅の長方形に設定した。調査はバックホーによる表土除去から開始したが、表土直下で柱穴状ピットが検出されたため、作業員による遺構検出、掘り下げに移行している。また、基礎部分の南東側については既存建物の撤去作業に際する重機の移動により、既に遺構が露出しており、申請者との協議により、部分的に調査区を広げて発掘を行うことにした。

#### 2. 遺構と遺物

##### 遺構

###### 柱穴状ピット群（第3図）

大小40個ほどのピットを検出したが、建物となるかは判断できない。

##### 溝状遺構

調査区東側の傾斜変換線付近で検出した幅40cm程の小溝である。弥生後期代の土器片が出土している。

##### 遺物（第4図、第5図）

1～3は傾斜変換線付近で検出したP-11としたピットより出土した弥生土器である。

1は甕形土器の口縁部片である。口縁断面はL字状を成し、口縁下には一条の三角突帯を付す。調整は内外面、ナデ調整を施す。色調は赤褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良である。復元により口縁部径27.0cmを測る。

2は小型の壺形土器。球形を呈する体部から口縁部へと至り、端部は丸く收める。調整は内外面、ナデ調整を施す。色調は明黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。器高3.1cm、口縁部径6.6cmを測る。

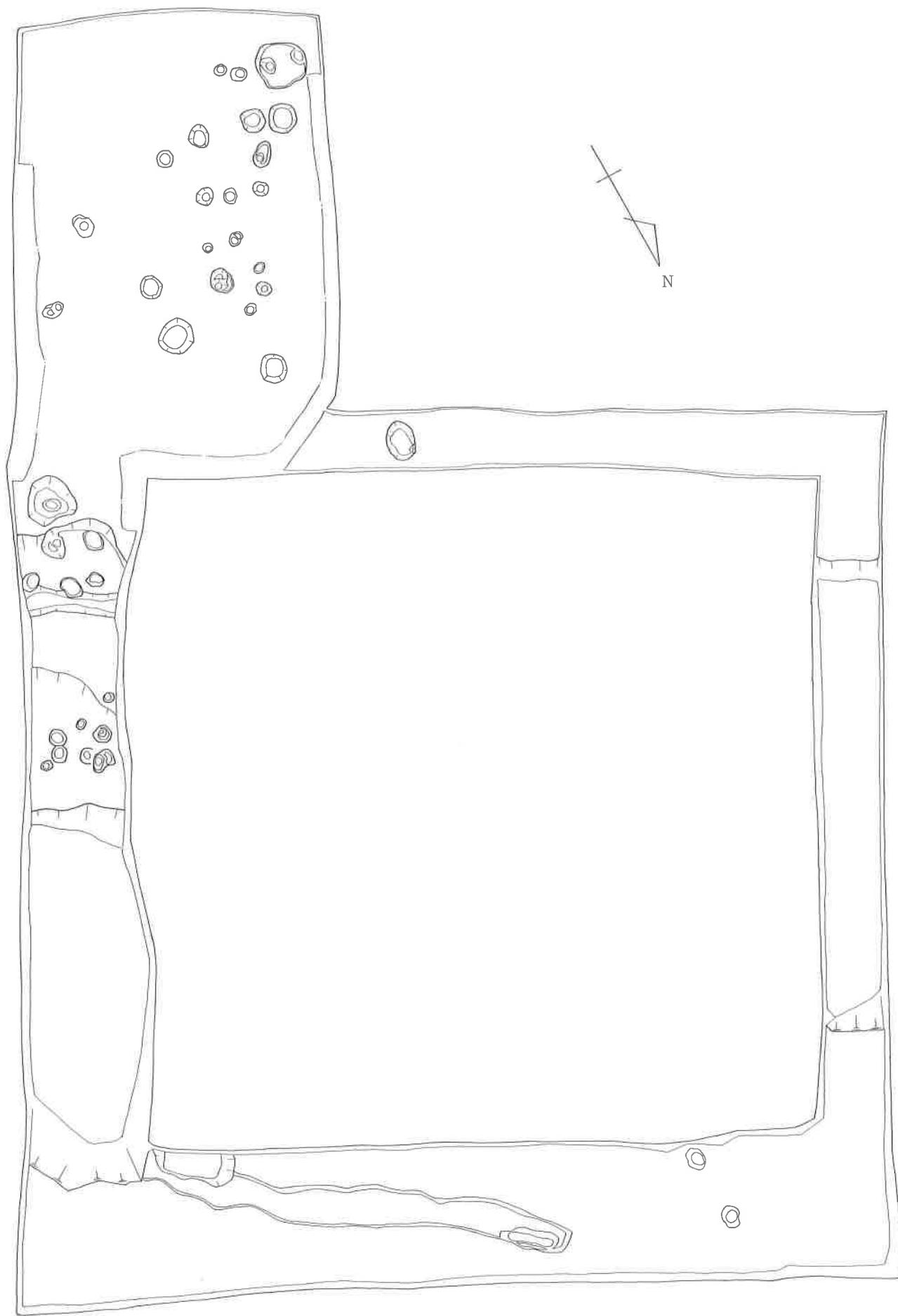
3は小型の甕形土器である。頸部のしまりは強く、口縁端部は丸く收める。調整は内外面ともにハケ調整後ナデ調整を施す。色調は明茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は不良である。復元により口縁部径6.8cmを測る。

4～6は傾斜変換線付近で検出した溝状遺構より出土した弥生土器である。

4は鉢形土器。体部は直線的で体部下位と口縁部下に稜線が入り、口縁端部はシャープに收める。調整は内外面ともに板ナデを施す。色調は暗褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は不良である。復元により口縁部径22.2cmを測る。

5は器壁が厚い鉢形土器である。体部が球形を成し、口縁端部は丸く收める。調整は内外面ともにハケ調整後、ナデ調整を施す。色調は褐色から暗褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良である。復元により口縁部径19.2cmを測る。

6は甕形土器の底部。平底を成し、直線的に立ち上がり胴部へと至る。調整は内外面ともにハケ



第3図 遺構配置図

調整後、ナデ調整を施す。色調は茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良である。底部径9.4cmを測る。

7は調査区東側の段落ちより出土した弥生中期の甕形土器である。口縁上面は平坦となり、器壁は比較的薄い。内外面ともにナデ調整。色調は明黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。

8、9はP-15出土の土師皿である。

8は体部が直線的に開くもので、口縁端部は丸く収められる。調整は内外面ともにナデ調整を施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良である。器高1.1cm、復元口縁部径10.2cm、底部径8.4cmを測る。

9は体部が底部から直線的に立ち上がる。内外面ともにナデ調整。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成やや不良はである。復元底部径8.2cmを測る。

10は包含層出土の土師皿である。体部は丸みをおび、体部中位に明瞭な稜線が入る。底部は糸切り離しとなる。調整は外面板ナデ、内面は強いナデ調整を施す。色調は茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良である。器高2.0cm、復元口縁部径8.8cm、底部径5.0cmを測る。

11は包含層出土の龍泉窯系青磁である。底部は比較的厚く、畳付から底部裏面までは裸体となる。色調は灰色を呈し、山吹色の釉をかける。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。復元底部径8.0cm。

12は包含層出土の擦り鉢の口縁部片である。体部から直線的に開き、口縁端部が凹線状となる。内外面ともに板ナデを施す。色調は黒灰色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は不良である。

13、14は調査区北側より出土した土師器塊。

13は土師皿。底部は糸切りとなる。色調は暗茶色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整を施す。焼成はやや不良である。復元により底部径8.2cmを測る。

14も土師皿である。体部が丸みを帯び、底部は糸切りとなる。外面板ナデ、内面は丁寧なナデ調整を施す。色調は赤褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良である。復元底部径12.0cm。

15は調査区東側の段落ちより出土した弥生後期代の高壺の壺部である。壺部の下位から外上方へと立ち上がる。内外面ともにハケ調整後、ナデ調整を施す。色調は明茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。

16は調査区北側より出土した白磁。玉縁口縁を成す。色調は灰色を呈し、黄緑色気味の釉をかける。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

17は調査区北側より出土した同安窯系の青磁碗。外面は櫛による猫掻き、内面は抽象的なジグザグの文様を描く。色調は灰色を呈し、黄緑色の釉をかける。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。

18は調査区北側より出土した龍泉窯系青磁碗であり、外面には鎧蓮弁文を表す。色調は灰色を呈し、淡緑色の釉をかける。胎土には微砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。

19は調査区北側より出土した青磁の皿である。底部は上げ底となり、直線的な体部から口縁分は丸く収める。見込み部には印刻を施入する。色調は暗黄白色を呈し、淡い山吹色の釉をかける。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。器高2.3cm、復元口縁部径11.4cm、底部径6.0cmを測る。

20～24は調査区西側より出土した弥生土器である。

20は甕形土器であり、断面L字を成す。内外面ともにナデ調整を施す。色調は褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良である。復元により口縁部径29.2cmを測る。

21は鉢形土器。口縁端部上面は平坦を成す。内外面、細かいハケ調整を施す。色調は暗茶色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良である。

22は甕形土器の小片であり、口縁下に段状の稜線が入る。内外面ともにハケ調整後、ナデ調整を施す。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良である。

23も甕形土器の小片であり、後期代のものであろう。内外面ともにナデ調整を施す。色調は暗褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は不良である。

24は底部であり、平底の感が薄れる。内外面ともにハケ調整後、ナデ調整。色調は淡橙色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良である。復元により底部径8.4cmを測る。

25も調査区西側出土であり、黒色土器と言える。口縁端部は凹線を入れる。内外面ともにハケ調整後、ナデ調整を施す。色調は黒色から灰白色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は軟質となる。

26、27は調査区西側より出土した須恵器である。

26は須恵器蓋の小片。宝珠部は欠損する。色調は灰色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良好である。

27は須恵器の甕口縁部片。内外面ともにナデ調整であり、外面には煤が付着する。色調は暗灰色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。

28～35は調査区西側より出土した土師皿である。

28は土師皿であり、体部中位に段を有する。内外面ともにナデ調整を施す。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を若干含む。焼成は良好である。器高2.8cm、口縁部径12.0cm、底部径8.8cmを測る。

29は小型の土師器の小皿であり、体部中位に稜線が入る。外面板ナデ、内面ナデ調整を施す。色調は褐色から暗褐色を呈し、胎土には微砂粒を若干含む。焼成は良である。復元により器高2.1cm、口縁部径9.2cm、底部径7.3cmを測る。

30は体部が丸みをおびる小皿である。内外面ともにナデ調整。色調は明褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良好である。器高1.8cm、口縁部径8.5cm、底部径7.6cmを測る。

31は体部下位に強い板ナデを施すことにより、稜線が入る。底部は糸切りとなる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。復元により底部径6.6cmを測る。

32は小片であるが、28に近い。内外面ともにナデ調整。色調は褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成はやや不良である。復元により底部径8.4cmを測る。

33は糸切りの小皿であり、底部から体部にかけては直線的となる。外面板ナデ、内面ナデ調整を施す。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を若干含む。焼成は良である。復元により器高1.5cm、口縁部径9.6cm、底部径8.0cmを測る。

34は土師皿の小片であり、底部は糸切りとなる。内外面ともにナデ調整を施す。色調は黄白色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良である。復元底部径10.4cmを測る。

35は30に近いが、体部下位に段を有する。内外面ともにナデ調整。色調は褐色を呈し、胎土には微砂粒を僅かに含む。焼成は良である。復元により器高1.5cm、口縁部径9.0cm、底部径7.2cmを測る。

36～40は調査区西側より出土した磁器碗である。

36は丸碗である。高台は低く、外面に化粧土が付着する。内外面ともにナデ調整を施す。色調は黄色がかった灰色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。器高12.4cm、口縁部径6.2cm、高台径4.9cmを測る。

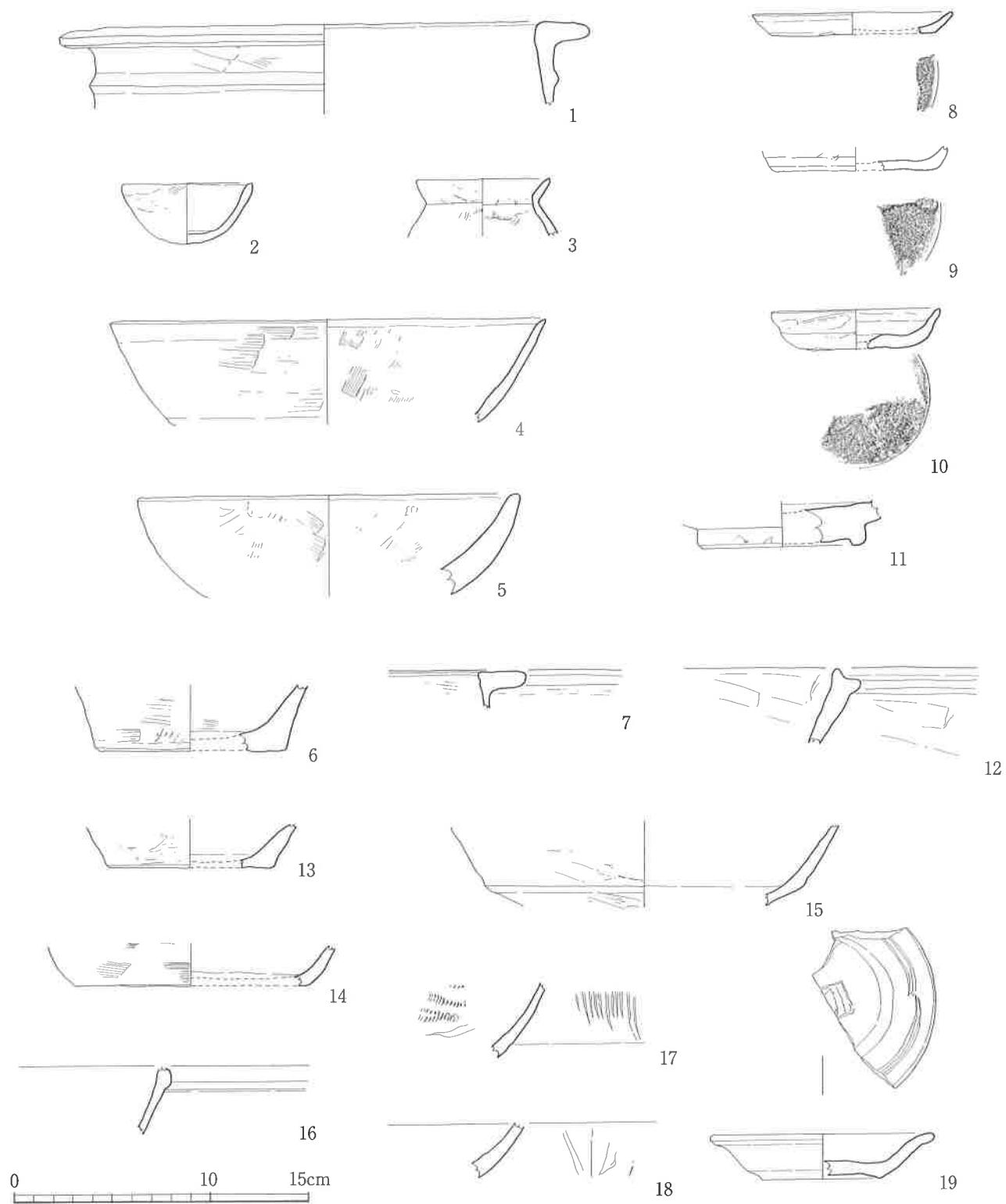
37は調査区西側より出土した白磁高台部。外面体部下位は裸体となり、畳付部の三箇所に目跡が残る。内外面ともにナデ調整。色調はくすんだ白色を呈し、白色の釉をかける。胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。高台径4.0cm。

38、39は調査区西側より出土した口縁部の小片。

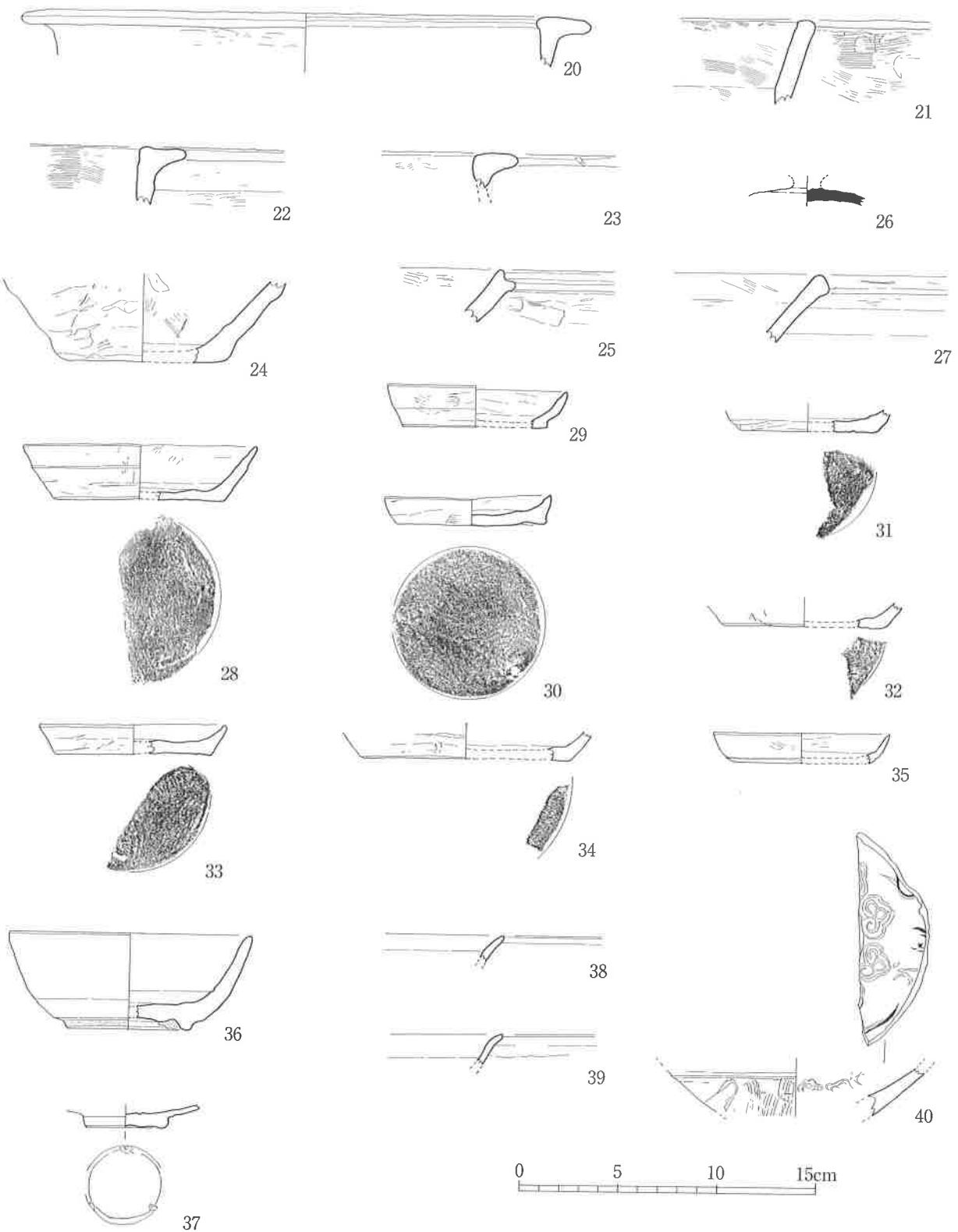
38は青磁であり、口縁端部は丸く収める。色調は灰色を呈し、淡黄緑色の釉をかける。精良な粘土により砂粒を含まず、焼成は良好である。

39は白磁。口縁下より上外方へ伸び、口縁端部は丸く収める。色調は灰色を呈し、くすんだ乳白色の釉をかける。胎土には微砂粒を若干含み、焼成は良好である。

40は調査区西側より出土した朝鮮陶器の体部下位の破片である。外面はハケ調整を施し、内面には白色土による雲形文が象嵌される。色調は小豆色を呈し、灰色の釉をかける。胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。



第4図 出土遺物-1 (S=1/3)



第5図 出土遺物-2

## IV. 調査のまとめ

### 1. 遺構について

本遺跡からは、調査区が狭小であったため、宝珠岳城に関する明確な遺構は検出されなかった。しかしながら、裾部の柱穴状ピット群の状況や北側段落ちより出土した遺物から見ると中世期の遺構が広がる事が想定でき、宝珠岳城に付随する遺構が存在することは間違いないであろう。

I項でも記述したが、同城は中世末期に築かれていたもので、大友氏の家臣である西左近鎮兼が城主として治めていたとされる。また、永禄十年（1567）には弟でもある波呂城主西 豊国ともども怡土の盟主である原田了栄（隆種）から攻撃を受けた、所謂、「宝珠岳城の合戦」の地であり、糸島の戦国期の舞台と言える。

宝珠岳城としては、現在でも頂上部を中心に郭や堀切りが残っており、今後、本格的な調査を含め、縄張り図の作成が望まれるが、今回の調査において検出した柱穴状ピットの存在は大きく、西氏の邸宅または、その一部であれば今後の周辺調査に期待がもてよう。

### 2. 遺物について

検出したピットからの遺物は碎片ばかりであったが、北側に向かう段落ちおよび深い部分に形成されていた包含層からの遺物について若干触れておきたい。

出土した土師器の小皿をみてみると、底部は糸切りとなり、器高2.1cm、口縁部径9.2cm、底部径7.3cmを測るもの（10、29、30）がある。これらは糸島地区の波多江遺跡や赤岸遺跡、ヲシマ遺跡の出土遺物と共にしており、概ね、15世紀から16世紀前半代のものと言える。また、北側包含層より出土した磁器（19）については、二丈中学校校内遺跡第1次調査より出土した磁器と共にの時期（16世紀前半）であり、「宝珠岳城の合戦」の時期と合致する点は興味深い。

### 3. まとめ

今回の調査において、15世紀末から16世紀前半の遺物とともに宝珠岳城に関連する可能性が高い遺構が検出された点は特筆でき、糸島地方における中世史研究に大きな成果を得たものと言える。また、今後、同城の調査ならびに西豊国の居城であった波呂城の調査が進めば、これまで史実の世界であった戦国末期の様相が見えてくるかもしれない。

最後になりますが、調査に御協力頂いた申請者である波多江寿氏、ならびに山城遺構に御教示頂いた福岡市教育委員会山崎龍雄氏に感謝を表わし、まとめとしたい。

# 写 真 図 版





調査区全景（北側から）



調査区全景（真上から）

写真図版－2



柱穴状ピット検出状況



柱穴状ピット検出状況（近況）



東側段落ち遺構検出状況



北側遺構検出状況

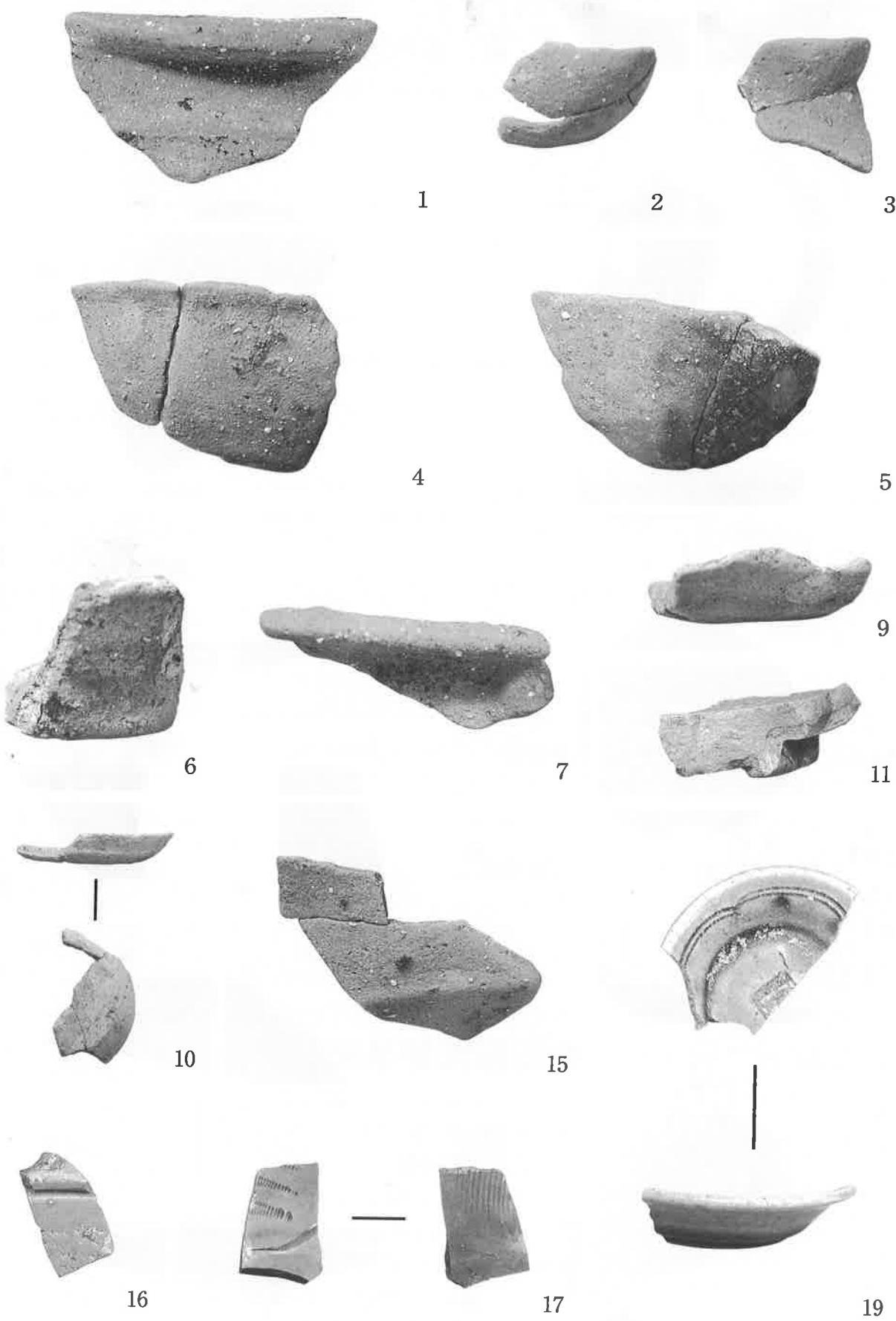
写真図版－4



調査区東側近景



調査区西側近景



出土遺物 1

## 報告書抄録

ふりがな	ほうじゅだけじょうしうへんいせき
書名	宝珠岳城周辺遺跡
副書名	二丈町文化財調査報告書
卷次	第45集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	菅さとみ
編集機関	二丈町教育委員会
所在地	福岡県糸島郡二丈町大字深江1360
発行年月日	2009年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号							
宝珠岳城周辺遺跡	福岡県糸島郡二丈町大字長石	46		33°	130°	080110	109m <sup>2</sup>	零細企業自動車修理工場		
	種別			30'	10'	~				
				23"	03"	080307				